（第一回）

2021（令和３）年度入学試験問題

国　語

（試験時間：50分）

《注　意》

(1)　問題は 一 ～ 三 まであります。
(2)　解答はすべて解答用紙に記入してください。
(3)　受験番号、氏名を忘れずに記入してください。
(4)　解答に際して、句読点・符号などが含まれる場合には１字分として数えます。

城西大学附属
城　西　高　等　学　校

一

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

日本の消費者運動のなかで最大の弱点となっているのは情報の分野といってよい。メーカー側、商社側などにくらべて、消費者側がつねに差をつけられているのは、この情報の分野である。正確な情報の不足、その情報処理の a フビなどが、とくに食品問題について、消費者運動を底の浅いものにとどめる結果となっている。

われわれのまわりに氾濫（はんらん）している商品情報のほとんどは、業者からあたえられたものである。情報の供給量、その早さなどを比較すると、メーカー、問屋、専門小売店、量販店、輸入商社なども含めた業者側にたいして、比較できないほど消費者側は分が悪い。①これは、メーカーなどが組織化され、利益追求というはっきりした目的があるのにたいして、消費者側は、個々に行動することが多く、目的意識もさまざまだからである。

業者側からあたえられる情報は主として広告という形をとる。新聞、雑誌、テレビ、ラジオなどの各種媒体を通して押し寄せてくる食品の広告は、われわれを溺（おぼ）れ死にさせるほどである。広告という形であたえられる情報については、溢（あふ）れこそすれ足りないということはけっしてない。それにもかかわらず、この種の情報は、「よい食品」を求めようとする場合にもっとも利用 b カチが低い。広告が消費者の「知る権利」に役に立っていることは認めるとしても、②広告を通して知った食品、選んだ食品がはたして消費者にとって必要なものであるかどうかは別問題である。とにかく買わせよう、商品名やブランド名だけでもおぼえさせようという広告が、とくにテレビ広告には多い。

食品メーカーも企業の c キボが大きくなるにつれ機能が分化することは当然のことである。広告宣伝を受け持つ広報部門が広告代理店、テレビやラジオの担当者とともに広告原稿をつくるとき、その食品の品質、販売対象などについて、もっともよく知っているのはメーカー側である。ところがその広報部門が、意識のうえで広告専門家化しがちなために、★ から見て「すぐれた」「洗練された」「あかぬけした」広告をつくる傾向がある。食品という商品を化粧品、自動車、衣服などを宣伝するような形で広告することが、はたして消費者の「知ろうとする」また「選ぼうとする」意欲にこたえることになるかどうか、考え直さなくてはならない。大メーカー製食品のテレビ広告のなかには、タレントや有名人を使ってムードで d インショウづけようとしているものが多いが、本当に自信のある品質を持っていないのではないかとさえ感じられる。ときには品質的にもすぐれたものが混っているだけに、残念な気がする。

広告にかんする教科書、参考書のなかでは、「広告の倫理」が説かれ、広告という形の情報が、消費者の「知る権利」（正確には、「知らされる権利」）「選ぶ権利」に、本当の意味で役に立つにはどうすればよいかが述べられている。A 現実には、広告という情報は無意識のうちに割引きされ

て受けとられ、広告をあたえる側も、そういう割引きを考慮したうえで情報を流している。日本ではごく当り前のこういう関係が、外国では認められないこともある。

昭和三五年前後、日本産の採卵鶏のひよこが西ドイツに輸出されたことがある。西ドイツの輸入業者は、③当時の日本では少しも問題にならなかった広告、[B]「一年間、毎日、卵を産みつづける系統です」とか「一年三六五個の卵を産む鶏をつくった種鶏(しゅけい)場のひよこです」という意味の広告を現地でも出した。

当時、日本の農林省や都道府県の種畜機関、またはこれにe ジュンずる検定施設が毎年行なっていた産卵検定では、実際に年間何羽かの三六五日連続産卵鶏が数えられ、三〇〇卵以上の産卵鶏にいたっては数十羽ずつ出現していた。こういう鶏を検定に出した民間の種鶏場または孵化(ふか)場は、ひよこを売るためにその実績を広告に表わしたのである。輸出された種鶏のメーカーもそういう実績を持っていた。

日本の養鶏家は、購入したひよこが成長して産卵を開始するまでに病気で全滅したというような場合は例外として、ふつうに育っていれば、たとえ平均して一羽当(あた)り年間三〇〇卵を産まなくても別に問題にしなかった。もともと、そんなことを真正直に期待してはいなかったからだ。ところが西ドイツでは広告の内容と実際の成績が違うということで苦情が出たばかりでなく、ついには告訴、裁判というような事態に発展したという。

さらに業者側には、本当に消費者に知らせなければいけないような特長を、自己規制して広告に出さないという傾向もある。業者側にとっては、抜けがけをされたくない、一社だけをよい子にはさせないという気持がどうしてもある。食品ではないが、昭和五一年にアルミサッシュの被膜の厚さが検査され、JIS(日本工業規格)の規格に達しない製品がかなりあることがわかった。ところが合格した製品について、その結果を広告などに利用したメーカーが、業界の非難を受け、始末書のような文書を書いたという事件があった。ここまで激しくなくても、似たような傾向は食品業界にもかなり強く残っている。

〈　中　略　〉

業界の連帯感は、たいてい異端者を袋叩きにして終るという結果になる。そのため、特長ある製品をつくろうと努力しているメーカーは、自社製品の特長のなかで消費者が知りたい本当のよさを広告に出そうとしなくなる。[C]、こういうメーカーにはもともと謙虚な経営者が多いからか、泥※試合になることを避けたいからか、そういう製品ほど広告される機会が少ないように見える。しかし、よい食品を求めている一般の消費者にみずからの製品の特長を広く知らせようとしないのは、④謙虚(けんきょ)というよりむしろ逃避、ある場合には傲慢(ごうまん)に通ずることにもなる。

結論すれば、情報を受ける消費者側に、その食品と業界および広告技術について十分な予備知識がある場合にのみ、広告という形の情報が役に立つということになる。いいかえれば、広告という形を

通してあたえられる情報は、そういう食品の存在およびそのメーカーまたは販売者のねらいを知ることにはなるが、そのまま受け入れるにはあまりにも問題が多すぎる。消費者がもてあますほど豊富にあたえられる⑤この種の情報が、消費者に役立つ度合からいえば、もっとも貧弱なのだから皮肉なものである。

（磯部晶策『食品を見わける』）

※ 泥試合…互いに相手の弱点・秘密などをあばきたてて、みにくく争うこと。

問一 〰〰部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄 A ～ C にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア しかし　イ したがって　ウ また　エ ところで　オ たとえば

問三 ――部①「これ」は何を示しているか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 消費者のまわりに溢れている情報のほとんどが、業者からあたえられたものであること。

イ 消費者が、業者からあたえられる情報の供給量や早さに差をつけられていること。

ウ 業者側があたえる情報が、主として広告という形をとるようになっていること。

エ 消費者運動が、あたえられる情報の少なさに不満を抱いた消費者によって起こされていること。

問四 ――部②「広告を通して知った食品、選んだ食品がはたして消費者にとって必要なものであるかどうかは別問題である」とあるが、それはなぜか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 消費者は広告を通すことでしか商品情報を受け取ることができないため、そのように限られた媒体から得た情報では本当に必要なものかどうか判断することが難しいから。

イ 広告を通して得られる情報は食品の品質や販売対象などについてであり、消費者が知りたい商品名やブランド名というものは発信されないから。

ウ 広告を通して表されている情報はあくまで業者が伝えたいものであるため、消費者が求めるものにこたえているとは限らないから。

エ 消費者は自ら進んで食品に関する情報を集めようとしているため、業者側の思惑が反映された広告は消費者にとって必要のないものだから。

問五　空欄 ★ にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア　表面の形
イ　真理の面
ウ　質の保証
エ　全員の目

問六　――部③「当時の日本では少しも問題にならなかった広告」とあるが、なぜ問題にならなかったのか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　業者側は常に正しい情報を広告に載せているため、消費者側も安心して購入できていたから。
イ　当時の日本では、業者側が実績を数字で表すことが広告としての信頼度に繋がっていたから。
ウ　消費者側は広告に出ている情報を、そもそも全て正直に受け取っていたわけではないから。
エ　業者側にとって商品の情報を操作することは当然であり、消費者もそれを望んでいたから。

問七　――部④「謙虚というよりむしろ逃避、ある場合には傲慢に通ずることにもなる」とあるが、それはなぜか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　消費者が本当に知りたい情報よりも業界内の思惑を優先することは生産者を馬鹿にした行為であるにもかかわらず、結果的に消費者が得をすることになるから。
イ　各メーカーが特長ある製品を出し惜しみすることで新製品の開発が見込めなくなり、結果的に業界そのものが廃れていってしまうから。
ウ　業者同士で抜け駆けを監視し合うシステムがあることによってそこから逃避する離脱者も出てしまい、結果的に消費者の怒りを買うことになるから。
エ　業界内事情を優先した広告をつくることは業者側の怠慢であり、それをし続けることは結果的に消費者の軽視につながるから。

問八　本文の内容にあうものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　業者が提供する食品の品質に自信がない場合に、戦略としてタレントや有名人を使った広告が展開されることがほとんどである。
イ　広告という形の情報は、消費者が「よい商品」を求める際に必要な「知る権利」や「選ぶ権利」に役立っていることが多い。
ウ　日本の消費者は広告の情報を真正直に信頼してはいないが、海外の消費者は厳しい目で監視していることもある。
エ　業者側にも消費者側にも悪影響を及ぼす可能性がある場合に、消費者に本当に知らせなければいけない特長は規制されることもある。

問九　――部⑤「この種の情報が、消費者に役立つ度合からいえば、もっとも貧弱なのだから皮肉なものである」とあるが、どのような点が「皮肉」なのか。七十字以上八十字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

高校一年の基と高校三年の玲於奈は幼なじみで同じ高校の吹奏楽部に所属している。瑛太郎は同じ高校の卒業生で吹奏楽部のＯＢでもあり、現在は外部コーチとして吹奏楽部の指導を担当している。

「あんたさあ、もう少し頭使いなさい、あ・た・ま！　こうなるってわかってたでしょっ？」

基の肩を掴んで、玲於奈が声を荒らげる。まるで弟を叱る姉だ。基は基で、珍しくふて腐れた顔で「はい、はい」と頷いている。片付けを終えて音楽室から出て来た部員達が二人を見ないようにしながら、でも見ずにはいられない、という顔で帰宅していった。

「二人とも」

少し声を低くして、間に入る。「トラブルなら音楽準備室でどうぞ」と、再び戸を開けて二人を中へ招き入れた。

「喧嘩なら家に帰ってからでも存分にできるだろ、君達は」

「喧嘩じゃありません」

きっぱりと玲於奈が言う。

「喧嘩じゃないなら、その揉め事は俺が介入してもいいような話題か？」

「介入も何も、瑛太郎先生も関係大有りです」

そうでしょ、と玲於奈が基を見る。①基は玲於奈から顔を背け、口をへの字にしていた。

「②基ったら、先週からずっと塾の夏期講習を仮病で休んでるんです」

腰掛けようとしたパイプ椅子から、そのままずり落ちそうになった。

「茶園――本当か？」

基はすぐには答えなかった。「基、答えなさいよ」と玲於奈に肘鉄され、随分と間を置いてから、渋々という様子で頷いた。

「基、午前中と夜からのコマを取ってるのに、どっちも体調不良で欠席するって自分で塾に連絡して休んでるんです。初日から、ずっと！」

その調子で休み続けるものだから、塾から基の母に電話があった。基に連絡しても音沙汰がないから、彼の母は一緒に部活をやっていると思った玲於奈に連絡した。オープンキャンパスからの帰り道でそれを受けた玲於奈が、学校まで飛んできた、ということらしい。

「基、あんたねぇ、練習出たいのはわかるけど、そんなことしても絶対にばれるし、親がますます部活にA目くじら立てるようになるってどうしてわかんないの？」

「わかってるって、わかってるよ」

でも、しょうがないじゃないか。喉の奥から絞り出すように、基が言う。口を開いたまま、言おうか言うまいか、一瞬悩んだようだった。でも、諦めたようにこう捲し立てた。

「僕は西関東大会で自由曲のソロが吹きたい。ソロ以外の場所も、課題曲ももっともっと練習して、頑張って、上手くならないと……上手くならないと、全日本に行けない」

玲於奈だってわかってるでしょ。そんな顔で、基は彼女を見た。

「県大会で、僕達五位だった。金賞獲ったっていっても、僕達の上に四つも上手い学校がある。でも、西関東大会から全日本に行けるのは三校だよ?」

唇を噛んだ基に、瑛太郎は思わず吹き出した。③笑わずにはいられなかった。

「話はわかった」

パイプ椅子の背もたれに体を預け、ふう、と大きく深呼吸をした。

「焦るのはわかる。俺も正直、西関東まで下手に時間があるもんだから、焦ってないといえば嘘になる。ちょっと練習に参加できないだけで下手になったらどうしようとか、コンクールメンバーから外されたらどうしようと思うのも仕方がない」

※音楽準備室を出て行った越谷と幸村の背中を思い浮かべながら、瑛太郎は言った。

「僕は今、吹奏楽以外のことをやりたくない」

身を乗り出すようにして基が言う。というか、叫ぶ。玲於奈が何か言おうとしたのをはね除けるようにして。

「寝るのもご飯を食べる時間ももったいない。僕はずっと練習をしていたい」

彼に今かけるべき言葉を、自分は持っている。持っているのに、出てこなかった。

よく知っている。吹奏楽以外のことなんて何もやりたくないと思う瞬間も、寝ることも食べることもせずに済むならその分練習したいと思う瞬間も。

「よくわかったよ」

音楽以外のすべてが煩わしくなって、不要に思えてしまうのも。

「ちょっと遅くなっちゃうけど、今週末くらいにお盆休みでも取るか」

今日、汗だくで音楽室にやってきた越谷を思い出す。誰も彼もが一生懸命だ。やりたいこととやるべきことが複雑に絡み合って、④彼等の熱意がそれに足を取られて暴走する。わかる、わかる。俺もそうだったから、凄くわかる。

「先生、でも」

休むわけにはいかないという顔で、基が口をぱくぱくとさせる。さすがに玲於奈も「ここで休むのは、ちょっと」と表情を曇らせた。

「一日休んだら、取り戻すのに三日かかるからか?」

B耳にタコができるほど言われた言葉だ。練習を一日休んだら、休む前の状態に戻すのに三日かか

る。だから一日とて休めない。休んじゃいけない。
「休もう、休もう。日本人は働き過ぎなんだ。頑張ることは美しいかもしれないけど、それで体を壊したり精神的につらくなるようじゃあ駄目だ。夏休みの宿題をやっつけて、スイカでも食って、クーラーの効いた部屋で涼めばいいさ」
高校生の自分だったら、こうはできなかった。休むこととサボることがイコールで繋がっていた。必死になることが自分のすべき唯一のことだと信じていたし、何より楽しかった。
「二人とも、俺に失望したか？」
基も玲於奈も、何も言ってこなかった。
「俺は、高校時代に吹奏楽にしか一生懸命になれなかった自分を、少し後悔してるんだ」
塾には通っていたけれど、コンクールの練習に忙しくなると辞めた。親に急かされて、コンクールが終わるとまた通い出す。瑛太郎にとって最も大事なのは吹奏楽だった。それ以外のすべては《仕方なくこなすもの》だった。
⑤少し後悔してる、というのは、だいぶ強がっている気がした。
「毎日毎日音楽について指導してるけど、俺が君達に最も伝えたいことは、自分の将来をしっかり考えろ、ということだ。そのためにやるべきことを理解して、選択を見誤るな」
⑥ああ、まずい。このままだと、だらだらといろんなことを話してしまいそうだ。みっともない、今更どうにもならない過去のことを、だらだらだらだらと。
「さて、茶園の家に行くか」
喉に力を入れ、そう言う。途端に基が「ええっ」と素っ頓狂（とんきょう）な声を上げて立ち上がった。
「な、何故ですかっ！」
「仮病を使って塾を休んで部活に来てたんだろ？　俺からも親御さんに謝らないとな」
「いや、困ります！　ていうか駄目です、絶対駄目！」
慌てふためく基に、玲於奈が溜め息をつく。
「ほら、嘘をつくと周りに迷惑がかかるんだよ」
手早く荷物をまとめて、二人を連れて校舎を出た。基は随分抵抗したけれど、玲於奈に「★！　馬鹿！」と頭を引っぱたかれたら大人しくなった。
「ちゃんと謝るんだからね。じゃないと、明日から部活に行かせてもらえないかも」
駅で電車に乗り込んでからも玲於奈はずっと基にお説教していた。世間はお盆休みだから、電車の中も平日に比べたら混んでいない。椅子に並んで腰掛けると、真ん中に座った基が「本当にすみませんでした」と瑛太郎に頭を下げてきた。
「親御さんにもそれくら素直に謝ろうな」
「……自信ないです」

「自信なくてもやるんだ」
うな垂れた基の頭を掌でぐりぐりと撫で回す。肩を落とし、彼は「頑張ります」と答えた。
十分ほどで基と玲於奈の最寄り駅に着く。ホームに降り立つ人は疎らだった。

（額賀澪『風に恋う』）

※　音楽準備室を出て行った越谷と幸村…この直前の場面で、オープンキャンパスを途中で抜けて吹奏楽部の練習に参加していた三年の部員である越谷と、三年生の一学期で受験勉強を理由に退部したにもかかわらず吹奏楽部の練習に頻繁に顔を出していた幸村に対して、瑛太郎は、吹奏楽部のことを思って行動してくれていることに感謝しつつも、「先々で『あのとき部活なんてやってなかったら』と思ってほしくない。それに吹奏楽を嫌いになってほしくない」「だから、あまり無茶なことをしないでくれ」と懇願するように話していた。

問一　――部A・Bの語句の意味としてふさわしいものを次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A　目くじら立てる
ア　目上の人からひどく叱られる
イ　ひどい体験をする
ウ　相手にしてもらえない
エ　ささいなことを取り立てて非難する

B　耳にタコができる
ア　他人の言うことが自分の弱点を突いているので聞いているのがつらい
イ　他人の言うことが耳障りで気にかかる
ウ　同じことを何度も聞かされてうんざりする
エ　表現方法が斬新で聞いていて心地よくなる

問二　――部①「基は玲於奈から顔を背け、口をへの字にしていた」とあるが、この時の様子・心情を説明したものとしてもっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　自分に非があることは分かっているが、それを玲於奈に指摘され不満に思っている様子。
イ　瑛太郎に玲於奈との関係を冷やかされたが、玲於奈にきっぱりと否定さればつの悪い様子。
ウ　塾を仮病で休んでいたことを玲於奈が瑛太郎に勝手に話してしまったことに怒っている様子。
エ　怒り心頭の玲於奈の勢いに圧倒されてしまい、言いたいことを我慢している様子。

問三　――部②「基ったら、先週からずっと塾の夏期講習を仮病で休んでるんです」とあるが、それはなぜか。四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問四　――部③「笑わずにはいられなかった」とあるが、それはなぜか。次のア～エの中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　玲於奈が基を叱る様子と基のふて腐れる様子が、まるで夫婦げんかのようだったから。
イ　基が吹奏楽にかける思いの強さに対して練習に出るための言い訳があまりにも幼稚だったから。
ウ　出られるはずもない全日本のことを本気で目指している基があまりにもこっけいだったから。
エ　ちょっと練習に参加できないだけで基は下手になると思っているから。

問五　――部④「彼等の熱意がそれに足を取られて暴走する」とあるが、どういうことか。次のア～エの中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　全日本に出なければならないというプレッシャーが練習しなければならないという思いに拍車をかけ、夏期講習まで休ませてしまうということ。
イ　塾の夏期講習を休んでまで吹奏楽の練習をすることはやりすぎであり、家の人にもきちんと謝らなければならないということ。
ウ　自分が熱中していること以外のすべてのことが煩わしくなるほどに物事に打ち込むことは、瑛太郎自身も経験してきたことであり、気持ちはよくわかるということ。
エ　一つのことに熱中していたいという思いが先走ってしまい、他のこととの折り合いが上手くつけられず視野が狭くなってしまうということ。

問六　――部⑤「少し後悔してる、というのは、だいぶ強がっている気がした」とあるが、それはどういうことか。次のア～エの中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　あまり後悔していないということ。
イ　あまり充実していないということ。
ウ　とても後悔しているということ。
エ　とても充実していたということ。

問七　――部⑥「ああ、まずい」とあるが、それはなぜか。ふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　基たちの熱意に押され、基たちに感情移入してしまい、指導者としての威厳を失ってしまいそうだから。

イ　熱中している基たちに対して水を差すようなことを提案してしまい、基たちを失望させてしまいそうだから。

ウ　吹奏楽に純粋に取り組んでいる基たちに自分の高校時代を重ねてしまい、自分の弱みを見せてしまいそうだから。

エ　吹奏楽部の指導者であることを意識するあまり、自分が思ってもいないことまで長々と話してしまいそうだから。

問八　空欄［★］に入る四字熟語としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　自業自得　　イ　海千山千　　ウ　本末転倒　　エ　四面楚歌

問九　本文の内容・表現について説明したものとしてふさわしいものを次のア～カの中から二つ選び、記号でなさい。

ア　吹奏楽という専門的な題材を扱うことで高校生のありのままの日常が鮮明に描かれており、読者にとっても状況をイメージしやすく共感を誘う。

イ　指導者として振る舞いながらも、基たちの言葉や行動に対して自らの高校時代を重ね合わせる様子が、瑛太郎の視点を中心に語られている。

ウ　ところどころに情景描写がちりばめられており、吹奏楽に対する基と玲於奈の葛藤や瑛太郎の基たちを思う気持ちが象徴されている。

エ　基が仮病で塾を休んでいたことに対して冷静に対処する玲於奈の態度が、基の吹奏楽に対する情熱を引き立たせている。

オ　登場人物の発言だけでなく、表情や行動の様子が丁寧に描写されており、読者にもその様子がイメージしやすくなっている。

カ　高校生である基たちと指導者である瑛太郎との間には越えられない深い溝があるが、気持ちの根底では通じ合っており、美しい師弟関係が描かれている。

三

次の二つの図は、ともに東京地方の「～じゃん」という表現を用いるかというアンケート結果である。それについて先生と生徒が会話をしている。あとの問いに答えなさい。

図Ⅰ

図Ⅱ

出典：國學院大學　国語研究会『国語研究第七十六号』
「新東京都言語地図点描 ― 音韻・アクセントといくつかの項目の分布から ―」

先生：図Ⅰは高年層に対するアンケートの結果だね。

生徒：［　①　］が一番多いみたいですね。高年層は「～じゃん」とは使わないみたいですね。

先生：そうだね。［　②　］人は多いみたいだけどね。

では、図Ⅱの青年層の図を見てみよう。

生徒：図Ⅱでは［　③　］が一番多いように見えます。

先生：そうだね。「～じゃん」という表現を使う人が多いみたいだね。

この二つの図からわかることは何だろう？

生徒：う～ん。「～じゃん」という表現は伝統的な「江戸方言」ではないということですか？

先生：その通りだね。東京地方では「［　☆　］」といえるのではないかな。

生徒：けれど、「～じゃん」は教科書に載るような表現ではないですよね？

先生：そうだね。東京地方の青年層は［　④　］でもなく、教科書にも載らないような言葉を［　⑤　］として認識していることになるね。

生徒：なんだか、面白くなってきました！

問一　空欄［①］・［③］に当てはまる記号としてふさわしいものを次のア～オの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　●　　イ　◎　　ウ　□　　エ　▲　　オ　◇

問二　空欄［②］・［④］・［⑤］に当てはまる語句としてふさわしいものを次のア～キの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　聞いたこともない　　イ　聞いたことがある　　ウ　今は言う

エ　地方から流入してきた言葉　　オ　伝統的な「江戸方言」

カ　全国に広まった言葉　　キ　よく使う言葉

問三　空欄［☆］にあてはまる言葉を考えて、答えなさい。